静岡市における人々の娯楽活動と娯楽施設の歴史社会学

天　野　景　太

1　本稿の概要

本稿は、静岡市における市民の娯楽〜繁華街や娯楽施設で過ごす人々の休暇や遊び（楽しみ）のありかた〜の変遷を整理し、解読を試みた研究ノートである。

都市、ことに大都市の多くは、歴史的に人々の日常生活（「ケ」の場）のために供される空間のみならず、非日常生活（ハレの場）をすごすための空間が、パブリックな空間として担保されてきており、そこにおいて娯楽活動が展開されてきた。また近代以降、俸給労働者（サラリーマン階層）の存在が一般化し、居住空間と職場空間が分離されるに伴い、彼らの娯楽活動は非日常の時間のみならず、居住空間と職場空間との間、すなわち通勤・通学の途上などの半日常とでもいえる時間に行われる機会も多くなり、特に鉄道による通勤者の比率が高い大都市においては、ターミナル駅の周辺を中心として、これら半日常の娯楽活動を提供する役割を果たす場所として、盛り場空間が発展してきた（天野、2006）。

しかしながら、人々の娯楽活動の内容やそれを支える娯楽施設、盛り場空間などの諸相は、それぞれの都市の個性、たとえば娯楽施設の立地特性、提供されるサービス内容、地理的条件などに大きく影響を受ける。そこで本稿では、静岡市という一地方都市の近現代において、市民、特に青少年がパブリックな空間において展開する娯楽活動や、その活動を展開する場所である娯楽施設がどのような変遷を辿ってきたのかを概観する。

記述のための素材として、主に写真・絵はがきを主とした画像資料を使用、そこに切り取られた各時代の風景を読み解いた。また、静岡市で生まれ育った人が語った証言集やエッセイを副次的に用いた。また記述の期間は、近代（明治時代）以降を対象とするが、主に昭和時代、特に昭和30〜40年代の、人々の娯楽が変化・多様化していったと考えられる時期の娯楽施設や盛り場空間の変化に着目した。なお、本稿における静岡市とは、2009年現在の静岡市域に含まれる地域全般（旧静岡市・旧清水市など）を想定している。

まず第一に、市民が夏休みや休日に楽しむ場所としての娯楽施設の変遷を記述する。第二に、施設のような人工空間ではなく、自然を利用して行う娯楽活動のあり方として特徴的な海水浴の歴史に関して記述する。第三に、非日常の楽しみのみならず、半日常の楽しみを提供する機能を含む静岡駅周辺の盛り場空間の変遷を記述する。

2　静岡市の娯楽施設の史的展開

まずは、静岡市における娯楽活動の歴史を、娯楽施設の変遷から読み解いていこう。

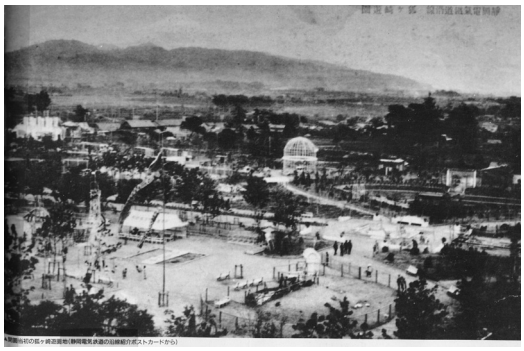
狐ヶ崎遊園地の変遷史

静岡市の娯楽施設の歴史を語る上で、狐ヶ崎遊園地の存在を外すことはできないだろう。この遊園地は静岡鉄道の手により、同鉄道の沿線である狐ヶ崎駅前に1926年10月31日に仮開園、1927年４月に正式開園した。静岡鉄道の社史には「静清地方に健全な行楽地がないことから、阪急の宝塚に範をとって計画したもので、一万坪の敷地に、ボート池、芝生、花壇、遊歩場、小動物園、植物園、さらに各種娯楽施設、運動施設、」食堂売店等を配置し、ときには季節的な行事を開催するなど、終日、行楽を満喫できるように設計した。」（ダイヤモンド社、1969）とある。模範とした阪急の宝塚新温泉は1911年に開業。阪急宝塚線（梅田－宝塚）を、大阪、梅田への通勤客だけではなく、反対側のターミナルである宝塚へも乗車してもらうことを目論み、沿線住民の鉄道利用促進の一環として開設された。ファミリー層への認知度を高めるために、テーマソングを沿線の小学校に配布するなどのプロモーション活動を行っている。その後、関西を中心に同様のビジネスモデルを採用した電鉄系の郊外型遊園地が各所に開業したが、それから遅れること15年、一地方私鉄において同様のビジネスモデルを採用した遊園地が開業したわけである。

狐ヶ崎遊園地の特色は、設立当初から遊具の集合体としての遊園地施設のみならず、総合的な娯楽施設として計画され、営業していたことが挙げられる。当時、清水市有東坂に居住していた堀池慶作氏は開業間もない頃の狐ヶ崎遊園地に関して以下のように証言している。

> 広場には花がいっぱい植わってさ、野外劇場ではドイツの水兵さんが演奏したこともあったっけよ。秋には菊人形も登場し、本当に華やかだったよ。動物もたくさんいてね、静岡県内には動物園がなかったから動物が珍しくて、遠く浜松あたりからも大勢やってきてね。（中略）おさるの電車、観覧車、ビックリハウスなんかも人気があったっけ。（清水市総務部広聴広報課編、1985、p18）

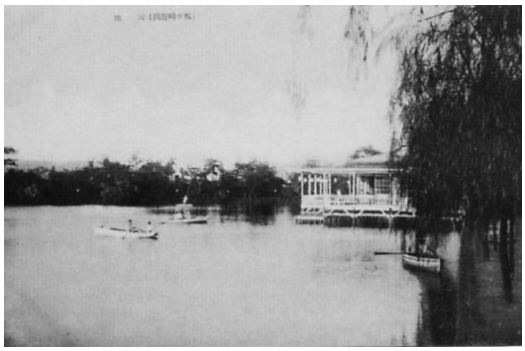
子ども向けの遊具や動物園など、ファミリー層に向けた施設構成が中心をなしていたものの、劇場やイベント施設を有し、大池周辺での納涼大会の開催などをはじめ、あらゆる層の人々に幅広い楽しみ方を提供し、市民の「非日常」の娯楽体験が凝縮されたものとなっていた。当時の狐ヶ崎遊園地は、静岡市において既に定着していた地域の祝祭行事の感覚を部分的に受け継ぎつつ、市民の大半が未経験であった近代の娯楽体験に邂逅させ、近代娯楽の市民への窓口としての役割を果たしていたといえる。



開業当時の狐ヶ崎遊園地（静岡鉄道、1989、p48）

①桜ケ丘につくられた大飛行塔（※1）

戦前の目玉アトラクションであった大飛行塔(静岡鉄道、1989、p48)



開業当時の大池（静岡鉄道、1989、p48）

開業当時の児童遊園（静岡鉄道、1989、p48）

このように総合的な娯楽施設として誕生した狐ヶ崎遊園地であるが、第二次世界大戦中は、軍に接収され、軍用施設の集積場として利用され、戦後営業が再開されると、その施設構成が当時の日本の娯楽の流行に備えて変化していく。戦後再開後から平成５年の閉園までの展開をまとめると、以下のようになる。

・昭和23年10月再開
・昭和25年、夏期納涼夜間開園、野外ステージの設置、石垣苺の栽培など
・昭和29年、岐阜の名和昆虫館の分室を設ける。
・昭和42年、狐ヶ崎遊園地を閉園し、翌昭和43年、狐ヶ崎ヤングランドを建設
　（昭和44年８月、市立日本平動物園開園）
・ボーリング場、アイススケートリンク、プールその他の遊技場や食堂など
・昭和52年４月、狐ヶ崎ヤングランドが新装開店（ジェットコースターなどを新設）
・平成５年、閉園
・平成11年、跡地に大型ショッピングセンターのジャスコが開店、ボーリング場はショッピングセンター内に内包

戦後もしばらくは施設を充実させ、総合的な娯楽施設を指向してきた同園だが、他の娯楽形態の台頭や娯楽体験の多様化に伴いたちゆかなくなり、「狐ヶ崎ヤングランド」としての再オープンを機

にターゲットを若者に絞り、彼らの半日常の娯楽体験にも対応可能なような施設構成を採用する。そして、大型施設を必要とする娯楽の流行が下火を迎えると閉園に至っている。この意味で、狐ヶ崎遊園地の変遷に、同時代の市民の娯楽に対するまなざしや嗜好が反映されている。

▲再開園当時の狐ヶ崎遊園地の入口で入場を待つ人々

戦後再開当時の狐ヶ崎遊園地入り口（静岡鉄道、1989、p82-83）

閉園直前の狐ヶ崎遊園地（海野、2007、p137）

ミニ遊園地としてのデパート

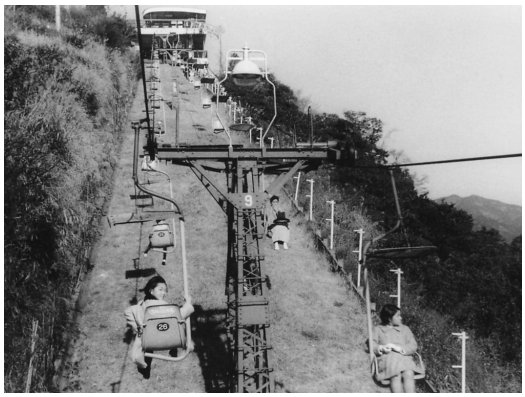
都市の子どもに対してささやかな娯楽体験を提供する空間として、昭和初期から昭和40年代頃までデパートの屋上遊園地が賑わいをみせた。これは、屋上遊園地のみを目的として訪れる人々のための施設というより、買物を含むデパートにおける時間消費の一環として訪問者に提供された空間であった。静岡市においては、松坂屋、田中屋（現・伊勢丹）両店において、屋上遊園地が展開した。

松坂屋屋上遊園地、昭和32年（海野、2007、p27）

田中屋百貨店の屋上観覧車、昭和36年（海野、2007、p51）

下界を眺める経験

山が市街地に近接している静岡市ならではの娯楽として、浅間山リフトの存在ある。1960年、静岡浅間神社の裏手、賤機山の山頂まで静岡鉄道がリフトを敷設した。これは、山の山頂から静岡市街を一望できることを利用した景観展望経験の提供に供するものであった。1960年代当時、東京タワーなどのテレビ電波塔への展望台設置に象徴されるように、高所から都市を一望できる展望経験を提供する施設は増加したが、静岡市の場合、それは山の頂上へ向かうゴンドラという形で表れたことになる。このリフトは、1974年の台風災害を契機として廃止されたが、高層建築物が珍しくなくなり、景観展望が多くの人々に支持される娯楽体験ではなくなってきた現在の状況を鑑みるに、災害を免れていたとしても、現在まで存続していたとは考えにくい。しかしながら、過去に市街地に景観展望用のリフトが存在したということは特筆されよう。



浅間山のリフト、昭和41年（海野、2007、p74）

浅間山の球形ゴンドラ、昭和41年（海野、2007、p74）

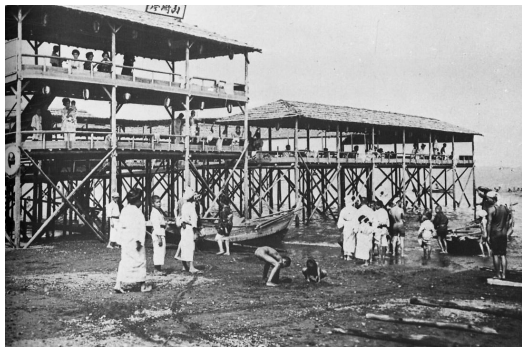
3　海水浴文化の展開

太平洋に面している静岡市であっても、海岸を利用した娯楽、すなわち海水浴に供するための海水浴場は、用宗および三保にかろうじて存続しているが、昭和初期においては袖師、横砂、大浜などの多くの海水浴場が開設され、賑わいをみせた。横砂在住の滝秀雄氏は、当時の状況を以下のように証言している。

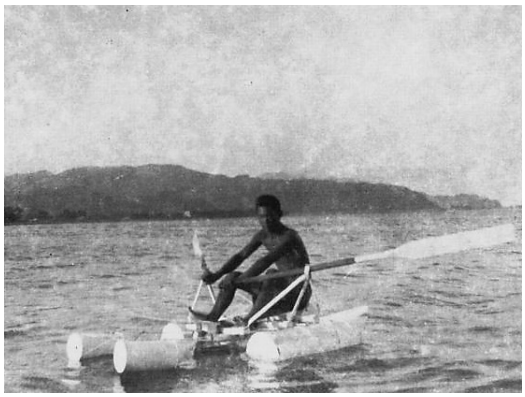
毎日、富士、静岡、藤枝あたりからも臨時列車で大勢海水浴にやってきてさ、そりゃあにぎやかだったねぇ。（中略）袖師駅に列車が着くたんびに人がドッと降りてきて、海は芋を洗うようだったよ。なにしろ列車横着けで便が良かったし、遠浅で、百メートル行っても胸位だからね。（中略）駅の前もキャンデー屋、海水浴用品屋、食堂なんかでたいそうなにぎわいでね。今、子供の遊び場になっている広場も乗降客でいっぱいだったよ。（清水市総務部広聴広報課編、1985、p53）

海水浴は主に子どもたちが夏休みを過ごす際の娯楽の選択肢として大きなウエイトを占めていた

昭和初期の興津の海水浴場（若林監修、1993、p176）



大正時代の江尻海水浴場
（ふるさとの100年、目で見る静岡県の今と昔p176）



江尻海水浴場の帆船、昭和10年代
（静岡新聞社出版局編、1989、p87）

袖師海水浴場（昭和26年）（静岡新聞社、1995、p77）

ことがうかがわれる。袖師海水浴場は、昭和30年代前半をピークに、衰退に向かう。

当時の子どもの娯楽体験は、いかなるものであったのか。横砂在住の山口博氏は、波乗りの思い出に言及する際、以下のように証言している。

波乗りは、子供たちの最高の冒険だったんだよ。何しろ台風が来ると目を輝かせて出かけたんだから。（中略）その当時の夏休みは、近くの子供たちが集まって勉強したり、自分たちで削って作ったバットや布きれを縫いつけて作ったグローブで遊んだり、上の子っちが下の子の面倒をよくみたからね。浜は子供達の遊び場、冒険の場だったけど、今の子どもたちは浜がなくてかわいそうだな。（清水市総務部広聴広報課編、1985、p50）

そこでは娯楽施設における体験のように、管理された“楽しみ”を受動的に享受するスタイルというより、解放された空間の中で“楽しみ”のスタイルを自ら探求し、実践していくものであった。

4　盛り場空間の変容

静岡市の中心部は、江戸時代には東海道の宿場町であり、駿府城の城下町であり、静岡浅間神社の門前町でもあった。現在、盛り場空間として賑わいを見せる静岡駅北口周辺は、この３つの顔の特性が混交する地域であり、江戸時代からの地区割りを概ね踏襲した空間構成をなしている。その中にあって、近現代を通じて人々の娯楽活動の中心でありつづけた地区が、商業空間としての呉服町、及び映画街としての七間町であろう。

富士山ネオンアーチ（海野、2007、p30）

呉服町名店街ビル完成、昭和33年（静岡市、1959、p34）

大正時代の青葉通り歌舞伎座
（ふるさとの100年、目で見る静岡県の今と昔p42）

七間町セントラル劇場昭和21年
（羽衣出版編集部編、2001、p69）

呉服町における商業空間は、東海道を旅する旅人のための商家が中心をなしていた。しかしながら特に戦後、複合テナントのビルの完成や大型店舗のリニューアルなどを経つつ、商業空間としての機能は変化させずに、「買物のついで」「学校・職場帰りの気晴らし」を目的として訪れる人々を主たる訪問者とするような空間へと変化していった。街道交通の主流が徒歩から鉄道へ移行する中で、東海道線や静岡鉄道といった鉄道交通を介して街を訪れ来訪する人々に、ストリートを遊歩し

ながら買物や食事を楽しめる、いわば半日常生活の空間へと変容してきたことが読み取れる。

七間町は、近現代を通じて、芝居や映画の街としての特色をみせている。特に、戦後、多数の映画館が軒をつらねる映画街であったが、映画の衰退と軌を一にして映画館数は減少した。しかしながら、ストリートを遊歩し、複数の映画館の上映映画を検討しながら映画を楽しむという、娯楽活動の形態に変化はない。

付　記

本稿は、静岡市生涯学習推進課主催『市民大学講座〜静岡を学ぶ〜 ６大学リレー講座』における筆者の担当回「娯楽から静岡市を考えてみよう：静岡・レジャーの歴史社会学」において展開した講演内容の一部である。それぞれの章の内容に関しては記述が不足している箇所も多いが、本稿ではエッセンスをまとめるにとどめ、各章の詳細はいずれ稿を改めて論じることにしたい。なお本講座の内容をまとめるにあたり、静岡市・清水市において生活をなさってきた鈴木恵子教授より貴重な証言を賜った。厚く御礼申し上げる。

参考文献

伊藤英明（1998）『巴川』光村印刷。
海野幸正（2007）『刻は流れて』羽衣出版。
海野幸正監修、羽衣出版編集部編（2001）『静岡今昔100景』羽衣出版。
さくらももこ（1997）『まる子だった』集英社。
さくらももこ（1998）『ももこの話』集英社。
さくらももこ（2004）『あのころ』集英社。
静岡市（1959）『静岡 写真集 静岡市政70周年記念』静岡市
静岡新聞社編（1988）『静岡市の100年写真集』静岡新聞社。
静岡新聞社出版局編（1989）『写真集 静岡県の昭和史』静岡新聞社出版局。
静岡新聞社編（1995）『静岡県民の暮らしにみる戦後50年』静岡新聞社。
静岡鉄道（1989）『写真で綴る静岡鉄道70年の歩み』静岡鉄道。
清水市総務部広聴広報課編（1985）『まちの思い出』清水市。
ダイヤモンド社（1969）『ポケット社史 静岡鉄道』ダイヤモンド社。
若林淳之監修（1993）『静岡県の絵はがき』羽衣出版。